
モー殺(ごろ)し

八二

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モー殺し

【ZPDF】

Z6092C

【作者名】

ハニ

【あらすじ】

パリで生活する3人の若者たち。「ぼく」と江頭、そして縄。閉ざされた生活の中で「ぼく」の気持ちが揺れる。日本のことを思つて揺れる。縄のことを思つて揺れる。江頭のこと、そしてモーのこと。「ぼく」は混乱しているのだろうか。

江頭えとうのリサイタルから帰つてすぐ、ぼくは父に手紙を書いた。

文面は考えず、一気に書いた。いつものぼくにはありえないことだった。

「お父さま、あなたにとつて、ぼくはなんなんでしょう？ わからなくなっています。あなたにとつて、なんなかがわからないままだと、ぼくは、ぼく自身にとつてもなんなかがわからないます。浮いているようです。地に足がついていません。フランスにいるとますますそうです。このまま、どこにも属さないで生きていく自分。ぼくは、自分に自信がもてないような気がします。」

素直な気持ちだった。父に素直な気持ちを書いたのははじめてだつた。認知されないまま、私生児として24歳まで生きてしまった。そんな自分がバカバカしかつた。

「もういい。なにをいつてもいい」

そういう気持ちが動いた。それは江頭の曲のせいだつたかもしきれない……。

リサイタルの江頭は格別だつた。なにが格別かつて？ なにもかも。いつもの江頭とはまるでちがつていた。江頭にはモーが來いた。ピアノを弾いていたのはたしかに江頭の指だつたが、後ろからモーの手が伸びていた。ぼくにはそれがはつきりと見えた。

でも、江頭とモーのことを書くまえに、はじめからもつといいろのことを説明しなければいけない。そうでないと、なにも語ったことにはならない。ぼくと江頭とモー。この3人は切つてきれない密接な関係にあるのだ。

江頭にはじめて出会つたのは古本屋だつた。学生にしてはひょひょ

と年をくつたフランス人の男が、段ボール4、5個を机の上に積んで売っている。そんな、にわかづくりの古本屋で会ったのが江頭だつた。香りのいい煙を撒き散らしながら、パイプをくわえている日本人。それが第一印象。年齢にはとてもみえない。はじめから年上と思つてしまつたぼくは、そのときから江頭に一步を譲つていた。

「日本人の方ですか？」

「ああ、そう」

「いい、匂いですね。パイプ煙草ですか？」

「アンフォラ。知らない？」

パリでだつたら、きっと江頭とそんなふうに親しくはならなかつたにちがいない。パリには、あまりにたくさんの日本人がいた。ちよつとは気になつても、首都で出会つていたなら、「へんな日本人」だけで終わつっていたにちがいない。実際、日本人を避ける日本人、日本人と思われたくない日本人、そんな人種でいっぱいのがパリ、この大都会だつた。きっと、地方から東京に出て来る学生も同じことを感じるのかもしれない。東京で生まれ育つたぼくは、おくればせながらパリに来てその気持ちをはじめて自分のものとして知つた。語学研修の南仏の町だつたからこそ、江頭とのその後のつき合いが可能だつた。その町にいた日本人はせいぜい20人。ピアノと作曲で政府給費の留学生として来ていた江頭は、中でも際立つていた。際立つていた、というのは、一方ではつまはじきにされていたこともいう。好んで自分から孤立していた部分もあるが、江頭はふつうに暮らしている人間とは相容れないものをもつていた。パイプもそうだが、人とちがうことやろう、やらなくちゃいけない。そういう気持ちが強かつた。23歳という年齢がそうさせていたのかもしない。でも、江頭にいわせれば、クラシックの世界で23は決して若くない。しかも、留学先がフランスというのはマイナーな位置づけにあつたようだ。

会つてから一週間も経つと、江頭は、ぼくが間借りしていた市内の小さな部屋で毎日のようにいつしょにいるようになつた。給費留学生に義務とされているフランス語の授業もさぱり、個人的に契約して借りていいレッスン場に行く以外はほとんどじぼくと話をしていた。

話すことは次から次、泉のよつにたくさんあつた。まつたくちがう環境に育つたし、してきた体験もちがう。日本で会つていたらこうはならなかつた。なんでもかんでも話した。笑つたり暗くなつた。お互いが、お互いの話を小説のように聞いた。こんなに気持ちが通じ合つなんて、きつとぼくたちはきよつだいだつにちがいない。

「バーカだよ、ここの日本人。みんな！」
「うん、日本引きずつて平氣な顔してゐる」
「あんな国、どうでもいいのになあ」
「自分の意志で來てないのは、しようがないけどさ」
「ンなことない！ 商社マンだつて、もう少し馴染みやいんだよ！」
「村かな？」
「村だよ」

ふたりはそうじやない、それとはちがう、という自信があつた。話をしながら、村社会=日本から自由でいる自分たちを確認し合つていた。それでいて、フランス語はまだ達者じやない。心が通じ合うのはお互いしかいなかつた。日本との距離、日本もフランスも客觀視したい気持ちがぼくと江頭に共通していた。完全にフランスに染まるのもイヤ、かといって日本をここに来てまで引きずつっていたくない。中間地点をぼくは江頭に、江頭はぼくに求めた。ほかの日本人は眼中になかつた。

「令子つてゆんだよ」
「ピアノ友達つてわけ？」

「いじわるでや、こつもこにい合ひばっかり」

「かわいいの？」

「かわいいけど、にくたらしげ。うまじンだそいつ、ピアノが。家にグランドあつたし」

「気になつた？」

「なつたね。追い越して、ピアノうまくなつて、いり……」

「つぶして？」

「うん、うん。ベチャつとぞ」

「やつちまいたかった？」

「やつちまいたい、つて、そつちじょなこよ。そつこつ意味じやない。子供だよ、おれもそいつも」

「同じ同じ。気持ちは同じ。むしろ子供のまづが純粋に出るー。」

「おまえ、ときどき、エスカレートするよな」

「エスカレートじやなくて、ファンチックつていつてほしけな」

「ファンティック？」

「音楽家は語彙が少ない！ ほら辞書辞書！」

生きたフランス語に接したかつた。でも、毎日の会話はものを買つたり、道を聞いたりぐらいがせいぜい。一十数年間に蓄積した精神をうるおしてくれることばを、フランス人から期待するのは無理だった。江頭にとつてはぼく、ぼくにとつては江頭がこの時期の情操のすべてだった。語学研修の町。ここで閉じた生活では、江頭だけがオアシスだった。いや、逆に閉じた空間だったからこそ、江頭とぼくの関係はあつたのだ。町がふたりの毎日を支えていた。いつしょに歩く、町第一のミラボー通りの長さが、ブツンと切れるその終わりが、そのままふたりの世界だった。

町がふたりの関係をつくっていたと強く実感したのは、パリに行つてからだった。変わっていくのがわかつた。自分も、ふたりの間も……。

それが望みだつたのだからとやかくい「ことじやない。パリで本

を買いたかった。江頭は、本来の留学先で腕を、感性を磨きたかった。たしかに、その目的で来たのだ。語学だけの3か月なんて、がまん以外のなものでもない。でも、変なのが、それがちがうようにも感じた。あんなにイヤだった語学研修の町を、パリに行つてからなつかしく感じることがあった。いや、もつと正確にいうとそうじゃない。パリの毎日はおもしろかった。忙しかった。南仏の町を思い出すことなど少しもなかつた。あそこの生活がよかつたのかかもしれない、と思うようになつたのは、江頭との間があんなふうになつてからだ。それまでは、ぼくたちはどちらも、生け簍^すから川に放された養殖魚のように、ただただ、現実の流れに身をまかせて楽しんでいたというのが正直なところだ。思い出すより前へ、前へ。

「ピアノを聞かせてやる」なにを思つたのか、江頭が突然そういうだしたことがある。パリに移つてから3か月ほど経つた、底冷えのする1-2月のことだつた。

「こっちだ、こっち！」

大仰なオーバーコートに身を包んで、江頭はネコの多い裏街をずんずん歩いていった。ぼくはといえば、気に入つたコートを見つけることができないまま、突然冬に突入してしまつた気候をうらみながら、濃いグリンの厚手のレインコートに裏地をつけただけの寒々しい格好をしていた。江頭が連れていつてくれたのはいかにも古いアパートマンで、そこの4階に教授の知り合いの部屋があり、いま空き家になつていていうという。詳しい話は江頭もよくわかつていないうだつた。なにしろフランス語でまくしたてられ、ともかく、ピアノのある部屋を勝手に使つていいことだけはわかつた、というありさまだつた。

説明をしながら、江頭は階段を先にのぼつていく。絨毯は擦り切れ、木の手すりのところどころははげ、ひつそりと静まり返つてゐる住人たちの生活があまり豊かとはいえないことが察せられた。階

段照明の点灯時間もみじかく、4階にいくまで、もう一度2階の踊り場でスイッチを押しなおさなければならない。

そして案の定、ドアを開けたとたん、部屋の中からはカビくさい空気がぼくたちを襲つた。

「ずいぶん住んでないんじゃないかな？」

「知るか！」

「お化け屋敷だよ、これじゃ！」

「だから連れてきたのさ、おまえを」

「ひとりじゃこわい、って柄か、おまえが？」

「いまにアンフォラの匂いでいっぱいにしてやる！」

よろい戸を開けながら江頭が宣言した。外の光で照らされた部屋のなかには、たしかに立派なグランドピアノが置いてあつた。ただ、布もかけていなかつたので、ほこりが積もりたいだけ積もり、黒い光沢面もスマーケガラスのようにくすんでいた。

江頭は、ネコのようであつちの角、こっちのドアをせぐつては、さして広くない部屋を一巡していた。ぼくは寄りかからないように、触らないようにしながら、部屋の真ん中、グランドピアノの近くにただつつ立つっていた。

「ピアノ、今日は聴けそうにないな

「なんだあ？ 聞こえない！」

「調律が必要だろつていつてんだよ！」

「おい、ここンち、ベッドだけは立派だな！」

「住んでたの、年寄りかな

それでも新しい環境に興奮して、それぞれに大声をあげながら勝手に話していた。

そのときだつた。

「あのオ、日本人の方ですか？」

閉め忘れていた戸口に、背の低いやせた女が立っていた。日本語だった。肩の上までのストレート・ヘアが小さな白い顔を際立せ、ぼくは幼い少女が泣きながら立っている錯覚にとらわれた。

「きみは？」

「迷つてるんですけど……」

ああ、そうか。道に迷つてここまできたんだ。ぼくはとつとこそう思った。ぼくたちの声は、下の道路まで筒抜けなんだ。それを頼つて4階まであがつてきた。ひとり氷点でそう決めつけた。

「何、どしたン？」

ベッド・ルームからぼくのだらけの手をはたきながら出てきて江頭が尋いた。

「借りるつもりかしら、あなたたち、」「?」

「借りやしない。住むつもりなんかないわ」

「そう……」

「なんでそんなこと?」

「氣落ちしてるように見えたので、やせしくぼくは尋いた。
「下の部屋、借りようかどうしようかって、迷つてるんですけど
「住むの?」

「やめたがいい!」

「簡単に決めつけるなよ、江頭」

「だって、陰気じやん、」「」

「どうしよう!……」

「来たばっかりなの?」

「日本人の人気が上ならないかなって、のぼつてきたの……」

「だから、住まないんだ。ピアノやりにくるだけ」

「ピアニスト?」

「まあね」

「あたし、絵の勉強」

それが、縄との最初の出会いだつた。泣きそうな顔、もの「」とを決められないどうしようもない判断力。これは縄にもとから備わった性格で、べつに、迷っていたから悲しそうにしてたわけじゃない、ことはあとでわかった。結局、グズグズいいながらも、縄はそのアパートマンに住むことになり、江頭は週2回、幽霊部屋で自主レスンすることになった。1階下の縄の部屋はぼくたちのたまり場になり、江頭のピアノを聞いたり、縄の部屋でお茶を飲みながらしゃべったりという新しいパリでの習慣ができあがつた。カフェにいくことはあまりなくなつた。

縄の部屋は、幽霊部屋とは比較にならないくらい立派だつた。階段の貧しさとも無縁な豪華さ。もともとふたつの部屋だったものをドアでつないでひとつにしてあるので、広さは上の部屋の倍以上。第三帝政風とでもいうのだろうか、こいつた家具がゆつたりと配置されている。縄は、部屋を居心地よくする天才だつた。絵を描くというが、イーゼルも、それらしい道具も見当たらなかつた。時間と人生とやるべきことをもてあましているお嬢さん。そんな感じだつた。ぼくたちは、密約のように、日本の家族のことにはいつさい話題にしなかつた。

「めちゃくちゃ弾くのこの人。眠れない」

「興が乗つたときはショウがないだろ!」

「でもさ、江頭。下の人迷惑も考えなくちゃ」

「聴いてると、だんだん気持ちよくなつてくるンだけど……」

いつもこのときの、縄のこびたような泣き声は独特だつた。困つているけど許してしまひ。いつも顔をしながら、22年間生きてきたんだ、と思わせるものがあった。自己主張のあるようないよ

うな、微妙な表情がそのまま絹の顔にはりついて、性格にまでなってしまっていた。周囲の人間は、そんな絹の表情に接すると、困っていることはわかりながら、もつといじめてみたくなる。さらにひどいことをしても、この女の、この態度なら、なんでも受け入れてくれる、そう思い込んでしまう。

「つまくなつたよな、最近の江頭」
「あたしもやう思つ」
「江つち来るよつになつて、タッチ、変わつたな？」
「えらそうに！」
「部屋がいいんだよ」
「ほりがいのを」

たしかに、掃除したのは最初の日ちょうどだけ。それ以来、江頭は一度も部屋の掃除をしていなかつた。それがいいというのだ。古びたほこりの匂い、それにカビが混じると最高だ。おれにとつてドラッグだ。そもそもいついた。部屋と江頭のそんな関係を、ぼくは「モー」と名づけた。

「今日もモーかい？」
時間になるとぼくは尋いた。
「ああ、モーだ。モーに会つてくる」

江頭が上にいき、縄とふたりきりになつてしまはうすると、音が落ちてきた。もともと、ブーランクやデビュッシーが好きだといつていた江頭だったが、このころは弾く曲がちがつていた。イラ立つたように激しいかと思うと、やけに女性的になよなよとやさしい。混乱した曲想は、多分、どの作曲家のものでもなく、江頭が、モーがつくつていてるにちがいなかつた。

江頭が席をはずすと、ぼくたちは突然話すこと忘れてしまう。

江頭がピアノを通して語りかけてくる響きがふたりをとらえ、なんだか会話がしづらくなるのだ。そんなときだった、ぼくが絹に父親のことをはじめて話したのは。

「江頭さんにも話したの？」

「いや」

「どうして？」

「どうしてだか、男には話したくないんだ」

「困るわ」

絹は例の顔をした。

「男だと、なんだか弱みをつかまれるみたいでわ」「だつて、あんなに仲いいのに？」

ぼくは、男が社会的動物であること。社会の基本はグループ性と闘争だということ。だから、相手をやつつけようと思ったときには、都合よく常識というファンクションを発動させてメチャクチャに叩きのめすこと。そういうさびしい動物には自分の大事な部分を話しあたくないのだ、と説明した。絹は納得してはいなかつた。別のことを考えているようだつた。

「なんでも話してるとかと思つた……」

「おたがい話さない。家族のことは」

「そんなルール、どつちが決めたの？」

「さあ、どつちもかな」

「あたしには、じゃなんで話したの？」

小さな声だつた。

「女だから」

「女人にはだれでも話すの？」

「そういうわけじゃない」

絹はしばらく黙っていたが、やがて落ち着かなげに立ち上がり、「コーヒーをいれはじめた。ぼくは失敗したのかもしれない。自分の軽率さが後悔された。うべきではなかつたのかもしれない。自分の軽率さが後悔された。

「いつてほしいな……」

「えつ？」

キッチンで長いこと伸び続ける音がしたあと、絹は、やつとソファのところに戻ってきた。ぼくは自分の想念にとらわれていたので、瞬間、話の脈絡がわからなかつた。

「秘密あるの、なんだかヤ」

「秘密じやないけど……」

「だつて、江頭さんにいつてないなら、やつぱりそれは秘密よ」
低音から高音へ、大きく細かく、ダイナミックに江頭の指が演奏していた。ぼくは、暗い淵につき離されたように、自分を感じていた。

「そうね。機会があつたらね……。機会があつたら話すよ

外は雨が降つていた。石畳の水をはねながら、車が裏街をゆっくり通り過ぎていつた。

絹は、日本で勉強してきたので、フランス語はかなりできると自分でいっていた。でも、とてもほんとうとは思えない。3か月しか勉強していない江頭のほうが、よほど通じるフランス語を話した。だから絹は、外出するとき、ぼくか江頭を通訳がわりに連れて歩くことが多かつた。絹は、いつもお金をもつてはいたが、ぼくはプライドから、カフェやレストランの代金を払つていた。あとで知つたことだが、江頭といつしょのとき、絹は財布を江頭にあずけたそだ。江頭はプライドも傷つかず、財布もいたまない。

「モーの話題、あんまりするのよそづば

ぼくの本を買うのにつき合ってくれたあと、3人でカフェで話しているとき、突然江頭があたまをあげて「いた。目がにらんでいた。眠っていると思っていた江頭のままで、ぼくはモーの姿形について一生懸命、多少の脚色を加えながらおもしろおかしく縄に説明していたのだった。

「だいたい、モーなんてのはな、おまえの妄想だ。妄想のモーだ。そんのはどこにもいない！」

「なにムキになつてんの？」

「いるのはおまえのあたまの中だけ！ それだけ！」

「どっちでもいいわ、あたし。あたまの中にはいるだけでもなんでも」「いるンだモーは。たしかにいる。江頭だつて、わかつてるじゃないか？」

「おまえがいるつていいてるだけやー。」

そのとき、ぼくは、田のまえにそびえるサン・ジャックの塔が倒れてくる錯覚をおぼえた。江頭は変わってしまった。笑いながらぼくのことばに合わせ、「モーにいつくるよー」そういうつていた江頭はもういなかつた。変わつたのは縄のせいだつた。

「おもしろいやいいじやない。いると思えばいるのよ」

モーをいちばんはじめて見たのはもちろんぼくだつた。それは3人が3人とも、氣落ちしていた夜のことだつた。いつものように、縄の部屋で。その日は、なにかの記念日かなんかで、上等めのワインを買い込んでいた。鏡があつた。ぼくは、鏡に映つている江頭の後ろにモーがいるのを見た。グレーに近い空色。エクスクラメーション・マークから丸を取つたような、それをぼんやりさせたような形。それだけははつきりと見えた。いや、見えたといつよりも感じたといったほうがいい。それはそういう感覚だつた。

江頭は酒を飲むと眠くなる。いつものことだ。そのときも首を、心のなかのリズムに合わせて前後に振つていた。モーはそういうとき出やすくなる。何度もモーを見てから、ぼくは、モーの出やすい

状況をだんだん理解するようになった。

江頭は、奇抜な作曲家として、だんだん注目されるようになつていつた。ワールド・ミュージック系の旋律も採り入れ、アクロバティックに現代クラシックを展開していた。そんな江頭を、ぼくは一度だけ殴つたことがある。

めんどくさいことはそのままにする。解決しようとはしない。そのときの江頭はまさにそつだった。その気持ちがぼくにはとても憎かつた。縄のお腹に「子供がいる。江頭の子だった。どうする気持ちもない」という。

「どうする気もないわ」

「だつておまえの責任だぞ」

「責任なんていうな。おれはそんなものからも自由だー。」

「ぼくが縄のお腹のなかの子だとしたらどう?」

「そんな仮定するなよ。おまえとは関係ないことだ」

「自分のことばかり考えるなー。子供にも人格があんだ。それも考える!」

「おまえのいつてるのは責任じゃない、感情だ!」

「生きてるんだ。感情も、なにもひつくるめて大事にしてやれないのか」

「おまえは自分のことを重ねてるんだ」

「えつ」

「縄から聞いた」

「そんな!」

ぼくは、ソファでゆるく脚を広げて座つて、縄をにらんだ。縄は約束を破つた! いつもの泣き目がこんなに憎々しく見えたことがない。

「ぼくを安っぽく解釈するなッ!」

人を殴つたのははじめてだった。殴つたあとのジーンという感触

が、こぶしにも、部屋の空氣にも残つた。

南仏の町は噴水。パリは川。江頭のばかやろうはなにもわかつてない。ぼくはセーヌに沿つてただただ歩いた。川下にいくのはいやだったので、ひたすら上流を手指した。なにがあるわけでもない。ただ、さかのぼっていた。

人間は、ひだのたくさんある動物だ。怒りのひだ、喜びのひだ、悲しみのひだ。そのひとつにでも触れてくるものがあると、過剰に反応する。飛び上がらんほどになつてしまふのが人間だ。ぼくはちがう。ぼくはふつうの人間ではない。だから、ひだがない。どんなに悲しい目に遭つても悲しくならない。泣いたりしない。どんなに怒りの感情にとらわれそうになつても、怒りの中枢に届くまえにフワツ、消えてしまう。だから、江頭のことも気にならない。江頭がだれと恋をしようがぼくには問題ではない。どうでもいい。できた子供をどうしようと、ひだのないぼくには、なにも起こらない。ぼくときたら動かない、動かさない。文句をつけることはあっても、それつきり。それ以上はいわない。相手を追いつめない。自分も追いつめない。感情はいらない。気持ちが悪くなつたら、そこからいなくなればいい。それだけだ。

モーを殺すのは江頭のためだと思つた。いま、成就しかけているクラシックでの成功はみんなモーのおかげだ。だから、モーを殺せば江頭の成功はなくなる。縄とのこともそう。モーのしわざだ。このままでは、ぼくがモーを殺すまえに江頭が死んでしまう。そう確信した。ねたみからじゃない。ほんとうに江頭のことを思つているのはぼくだけ。ただ、どうやつたらモーを完全に殺せるか、それがぼくにはわからなかつた。

「どうなつてんだ！ どうこうことなんだこれは！」

下の部屋で江頭を見送つてからしばらくして、江頭の罵声が階段中に響いた。計画どおりだつた。江頭は最高に動搖して駆け下りてきた。

「綿、おまえか」

綿はおびえて、少しづつ奥の部屋のドアのほうに後ずさった。首を痙攣のように振って、しきりに自分がやったのではないことを主張していた。

「ぼくさ。ぼくがやつた」

「ダメなんだ、掃除しちゃダメなんだ。おまえが一番よく知ってるはずだろ？」「…

「殺すンだ。モーを殺すンだ。それにはこれしかない！」

「あしたリサイタルだつて、知つててやつたンだな」

江頭はムチャクチャぼくに殴りかかってきた。それほどまで、モーに頼つている江頭がぼくには悲しかつた。あまりに悲しかつたので、打たれるままに任せた。

「モーだモーだいいやがつて、このッ…」

コンソールの上の花瓶が割れる音がした。綿の叫び声も聞こえた。

「おれにはそんなものはいない。実力だ！　おれの実力だ！…」

「ほんとにそなうなら、なんでぼくを殴る？」

血が出てくればくるほど、ぼくは冷静になつていた。

「モーはおまえがいつてるだけだろが　モーはおまえなんだよ！　わからんねえのか、モーはおまえ自身なんだよ、新田！」

ぼくが父親のことを打ち明けるのは、綿に対してもない。江頭に対してでもない。どちらにいうのもちがっている。ちがつてしまふ。意味も二ユアンスも。父親にこそ、ぼくは話すべきだ。そのとき、そのことがわかつた。まるで、光が下腹部からあたまの上につき抜けるように、そのことが一瞬にしてぼくにはわかつた。

リサイタルの客席に着いても、傷が痛かつた。顔・肩・腕……。

あつとあらゆるところが熱く、ズンズンした。同時に、江頭にいわ

れたことばが耳のなかに響いていた。熱のせいではない。でも、ぼくはフワフワ浮いていくように感じて、たまらず、となりの席の絹の手を強くにぎった。一瞬おどろいた顔をした絹は、すぐいつもの困った表情にもどった。そして、そつとぼくの手から自分の手をすり抜けさせた。それはみごとなくらい、距離感を保つたままのやらかい拒否だった。ぼくは、あたたかさと、冷たさが同時に身体に伝わってくるのをおぼえた。いつのまにか、絹は成長して大人になつていた。モーのぼくを追い越して。

「おまえがモーだ。モーはおまえだ！」

江頭のピアノがそう聞こえた。そのなのだ、ぼくはすぐにも席を立つて、自分のやるべきことをやりに部屋に帰るべきだった。でも、その気持ちを押しどどめるだけの音の魅力が江頭の演奏にはあった。流れるようにつややかだった。江頭は世界をつくっていた。自分の世界、自分と絹の世界をつくっていた。そして、たしかにモーもいた。そこからは、ぼくは未熟な存在としてオミットされていた。当然だつた。ぼくがやるべきこと、それは日本にあつた。肝を残してきたサルのように、ぼくはすべてを日本に残してきたのだから。

江頭のリサイタルから帰つてすぐ、ぼくは父に手紙を書いた。文面は考えず、一気に書いた。いつものぼくにはありえないことだつた。

了

(後書き)

第40回かわやか文学賞一席を受賞した作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6092c/>

モー殺（ごろ）し

2010年10月8日15時52分発行